

米國留學が人生の契機

私事になって恐縮だが、私は23歳の時に米國に留學する機会に恵まれた。当時、日本の大学院の2年目に入った時期だったが、授業料免除だけではなく、生活費まで面倒を見てくれるという条件で米國の大学院に留學できたのだ。

私が入った大学はニューヨーク州にあるロチェスター大学という小さな規模の大学である。日本ではそれほど名前の知られていない大学かもしれないが、ノーベル賞を受賞した東大の小柴名教授なども卒業しており、多くの著名な研究者を輩出している。規模の小さな大学ではあったが、近隣に世界的な大企業があり、潤沢な寄付が集まり、私のような留学生にも支援が出たのだ。

当時の日本と米國の所得格差は大変な大きさであり、奨学金でも出ないかぎり、日本から米國に留學することなど不可能であった。米國の大学で教えていた先生が東大に戻って

きて、給料が十分の一になったという話が語られていた時代である。

私にとっては、この留學機会を得たことが、自分の人生を大きく変えるきっかけになった。すでに日本の大学院に入っていたという意味では研究者としての道を歩むことは決まっていたわけだが、米國の大学院というまったく違った世界に飛び込んだ

留學生にもっと奨学金を

ここで、日本では得られない様々な経験をすることができたと考えている。

考えてみたら、初めて飛行機に乗る経験だった。海外はもちろん初めてである。当時は、日本国内で外国人と英語で話す機会是非常に少なかった。米國に到着した当初は、私の受験英語の知識と経験では、会話はほとんど成り立たない状況であった。そうした若者にとって、海外の生活に飛び込むということがいかに貴重な体験であったことが。

さて、日本も今、世界から多くの留學生を集めようとしている。政府も留學生30万人計画を打ち上げ、様々な方策によって日本に来る留學生を増やそうとしている。ただ、そうした動きの中で気になるのは、留學生への奨学金が非常に少ない点である。日本に来る留學生が増えても、生活費をまかなうためアルバイトに時間の大半をとられてしまうのでは、留學生なのか外国人労働者なのか分からない。そもそも、奨学金なしに海外から優秀な留學生を集

めることなどほとんど不可能であるのだ。

優秀な若者呼び込み重要

米國は今でも、海外からの留學生に積極的に奨学金を出している。豊かになった日本の留學生には奨学金は出にくくなったが、中国やインドなどの優秀な留學生が潤沢な奨学金をもらって米國に旅立っているのだ。米國だけでなく、最近ではオーストラリア、シンガポール、香港なども、アジアの優秀な留學生に奨学金を積極的に出している。中国でさえも、そうした国と競合して、アジアの留學生を集め始めている。

なぜ米國は海外の留學生にあれだけ多くの奨学金を出してきたのだろうか。もちろん、人道的な支援という意味もあるだろう。しかし、それは理由のほんの一部に過ぎない。米國にとっても、奨学金を出して世界中の優秀な若者を米國に集めることが、様々な意味で利益となるのだ。

米國の大学は世界中から集めた優秀な人材によって成り立っている。昨年ノーベル賞を受賞した4人の日本人でも、その2人は米國在住なのだ。学者だけでなく、様々な分野において、米國で学んだ途上國の優秀な人材が米國経済を支えている。大統領の父親だってケニヤから来ている。そして、米國社会を深く理解した多くの人材が母國に戻って社会の中核にいる。日本の政治や経済の中核にも限らない数の米國留學経験者がいるのだ。海外の優秀な若者を呼び込むことの重要性はますます大きくなっている。日本もこの潮流に乗遅れてはいけない。

アシアの優秀な留學生に奨学金を積

(総合研究開発機構
理事長・東大教授)